

# 政治・メディア・政治漫画(2)

茨木正治

## I 問題の所在

政治シンボル論と政治漫画

### (1) 政治シンボル論の系譜

1. II 「シカゴ学派」——メリアムとラスウェル——
2. M・エーデルマン——政治儀礼と政治言語——
3. シンボル操作研究の流れ
4. 最近の政治シンボル研究
- ① 八〇年代以降の政治シンボル研究

(以上 第三卷第二号)

### ② 儀礼としての選挙

### ③ 政治漫画との関連

5. 日本の政治シンボル研究

## (2) 隣接諸科学の政治シンボル研究

## III マス・コミュニケーション論と政治漫画

### (1) 「効果研究」の系譜

### (2) 「現実の再構成」論と政治漫画

### (3) 批判学派の理論との関連

## IV 結論と展望

(以上 本号)

## 4. 最近の政治シンボル研究

## ①八〇年代以降の政治シンボル研究

『政治コミュニケーション』(Political Communication 10(2), 1993) 誌は一九九三年春季号で「シンボルと政治」というシンポジウムを掲載している。その中でM・エーデルマンの政治シンボル論に触れ、彼の現在までの研究の足跡とそれをもとにした諸研究を紹介している。

主宰者であるD・グレーバー(D. Graber)は、エーデルマンのもっている問題関心を「政治ディスコースによる人物ないし問題のイメージ形成と現実の構造化」(Graber 1993, p. 97)と位置付けて、代表的著作をそれぞれ、(a)政治シンボリズムと政治行動・世論の分析 (Edelman 1964)、(b)シンボルがもつ大衆への役割の検討 (Edelman 1971)、(c)政治行動とその結果に対して与える政治言語の効果の解明 (Edelman 1977)、(d)メディア報道がもつ現実の再構能力の考察 (Edelman 1988)、と特徴づけている<sup>(6)</sup>。

これらエーデルマンの政治シンボル研究を受けて、このシンポジウムは四人の研究者による様々な分野(世論・選挙・女性・社会運動)におけるエーデルマン理論(ないし視点)の展開を試みている。四人の論文に共通する特徴は、政治信念の流動性(移ろいやすさ)を射程に収め、この流動化が生ずる過程に作用するシンボルの様子を明らかにすることにある。

## i W・ベネット

世論形成がデモクラシー神話の確立を促すことを関心の焦点に据えてシンボリックな側面からこの神話を読み解くことを試みたのがW・ベネット(W. Bennett)である。彼は、世論と国民主権との関係はリベラル・デモクラシーの理想形態として神話化されやすいと述べる。また、この神話が現実にあてはめられるというよりも、現実を解釈する手

段として利用されることが多い、とも指摘している。それは、世論(調査)研究者と、世論形成の主役たるべき民衆がともに抱えている陥りやすいドクサ (doxa) によるものであるとしている。まず、世論研究者がもつ自己対象化の拙さ(社会的自己の認識の不徹底)は以下のようになる。

先にあげたリベラル・デモクラシーの理想郷では、自立して啓かれた市民が代議士たちと議論を行い、選挙の際には政策や争点の合理的な選択と明晰な政策形成のための情報を分かち合い、それらが世論を形成するとされる。この理想が神話化されるには、自律的で合理的な選択や行動が可能な「市民」の存在を信じる立場(「人民主義」と呼ぶ)が前提として考えられる。他方、政治家の一般受けを狙ったパフォーマンスに容易に迎合する有権者や(イラクに対するアメリカの軍事制裁実施によって米大統領の支持率が急増することなど)、日本の総選挙に見られるような「地元の面倒をみる」利益代表を選出する近視眼的な関心しか持ちえない有権者の姿を目のあたりにすると、上記の神話の実現のためには「貴族主義的な大衆社会論」に基づく「愚民観」から無知な大衆を有能なエリートが指導するという立場(「エリート主義」と呼ぶ)も神話形成の前提として存在すると考えられる。この「人民主義」と「エリート主義」とが世論研究者の中に同時に存在することは、諸々の世論研究をこれら二つの立場の間の対立に巻き込んでしまう(しまっている)とベネットは述べている。いずれの立場も、現実と自らの立場や理論との照合による自画像の修正を怠り、大量かつ曖昧模糊とした政治状況から抽象化されそれぞれ別個の意味をもつようになった政治シンボルと化していると彼は批判をする。

次にこの「盲目崇拜」(fetishism)によって形成される「世論」観は、それ自体が現実から乖離した「構造物」(constructions)となってメディアを媒介して民衆に伝わる。この場合、後述するように「世論観」自身が世論となって受け手としての民衆に伝達されるということになる。情報の量的過剰状態にある現代社会に生きる人々にとって、自己イメージをとまなうこの「世論観」も容易に享受されうるのである。

このような世論(調査)研究にみられるドクサの存在が、研究の面では停滞を招き民衆の面では「盲目崇拜」のシンボル化から生ずる支配をもたらしと危惧するベネットは、その閉塞状況の解消にエーデルマンのシンボルに関するアプローチを導入する。

エーデルマンは、シンボルの凝集性と感情の喚起性を提示して、それらが人心の掌握に寄与すると述べている。このシンボルのもつ特徴をベネットは利用する。争点となる問題に意見の対立が生じた場合の背景として、人々の置かれた社会環境、入手できる情報、対象となる争点の抽象化の度合い、などについてそれぞれ相違があることをベネットはまず指摘する。このことは、争点というシンボルを享受する受け手の認知や争点から得られる意見が流動性をもつことにつながる。

個々人の意見が流動化しやすい状況のもとでは、政治家のみならず政治的なリーダーが人々の属する環境全般をシンボルによって規定するならば、これらリーダーたちによって構築された意見を世論としてみなしがちである。これはすなわち、個々人が依拠する文化システムにのっとったシンボルや言葉のカテゴリー化を公にして、その枠の内側で生じた争点や方策の理解の仕方を人々に了解させるからである。この了解は論理的にも情緒的にも行なわれ、他の問題、外敵、直接的な対象物、社会的利益などから個々人の関心をそらすようになされる。その結果、当該状況をリーダーたちによって規定してしまった個々人は、「公衆」(publics)ないし「公衆の意見」(public opinion)として構造化される。こうして、ベネットはエーデルマンの「文脈分析」(contextual analysis)を使って、世論を政治的文脈の中で流動性のある構造としてとらえていくのである。

## ii M・ハーシェイ

選挙の経験的研究を批判したエーデルマンに答える形で、彼の知見を導入しつつ経験的研究を展開させようとしたのがM・ハーシェイ(M.Hershey)である。

彼は選挙研究に対するエーデルマンの批判を次のようにまとめている。

候補者や彼の信念を指示するように用いられる政治シンボル、および支持態度や行動を修正させる方法を選挙の経験的研究では理論的に行なうことはできないし、かつ、政治キャンペーンの計画、政策支持の整理、社会制度の構築に言語シンボル研究は大きな影響を及ぼしたが、その影響は専ら権力の侍女としてのそれであって民衆の立場に立ったものではなかった。この問題を克服するには、理論としての広さと歴史としての深さの両方を兼ね備えた研究が必要である、と述べている。

このようなエーデルマンの選挙研究批判に対してハーシェイは、経験的研究のもつ権力志向的な性質は認めるものの、この批判によって直ちに経験的研究を捨て去るのも短絡的すぎると述べている。むしろ、エーデルマンの批判は経験的研究を退けるものではなく、新しい方向性を与えてくれるものであるとみなして、批判を積極的に取り入れることを主張する。

ハーシェイは、まず、批判の内実を検討するために選挙のもつ意味や性質をエーデルマンの考えに沿って考察する。社会内の価値配分の不平等が黙従を生むシンボル操作と政治の「避雷針」作用にあるというところからエーデルマンの政治論は出発する。前者は不平等を平等と思わせたり、ほかの価値に置き換えたりすることをシンボル操作によって行なうことである。後者の政治の「避雷針」作用についてはつぎのような説明がされるとハーシェイは述べている。

政治現象は日常の経験との接点をもちにくく、多様な解釈を生じやすいものであるから、現実による照合ができず人々は政治に対していったん不安をもつとなかなか解消しにくい。この不安を解消させるため（あるいは不安を生じさせないようにするため）に、目新しくドラマ的な手法によって意味づけを多く行なって肝腎の不安の目先をそらす。この手段の一つとして選挙によって神話とシンボルズムを駆使して人々の不安を解消させる。というのは、神話にはそ

れを信ずる人間に対して、その人の帰属意識をはっきりさせて敵と味方を峻別させるとともに、自己を見失った人々を救済させるはたつきがあるからである。さらに神話には正統(当)性の所在を確認させる機能もあるため、ここにおいて政策遂行者を正統(当)性の根拠とすることができるとなる。このことは、有権者ならびに国民の意識に選挙を通じて政治神話を浸透させることができるということにつながる。すなわち、有権者が投票により直接政治に参加するという意識(直接民主政の影響因としての有権者の役割の認識)が、日頃忘却していた政体(Constitution)への帰属感を生み、アイデンティティーの確認によって安心感をも培養させる。これにより、国民主権を選挙による政治参加が体现することになる。このため、選挙によって選出された政治家から政府が構成されると、政府の政策の正統(当)性の根拠に選挙が位置づけられるのである。<sup>(10)</sup>

政治参加と政治的影響力は現実には必ずしも一致するものではない。それだからこそ、シンボルやシンボリズムを用いて「まず形の上での一致」を図ろうとし、それを妨げる要素を隠蔽しようとする。政治(選挙)キャンペーンを組み合わされて選挙は上述した政治神話の普及に努めている。政策、争点、有権者への候補者パーソナリティー・パフォーマンスなどを通じて凝集シンボルを作り上げ、有権者の情動を喚起させる。それとともに、儀礼的行為(投票所において投票する行動、選挙の「七つ道具」、支持者との決起集会など)の実施およびメディアによる報道が有権者の政治参加への関与感を促進させる。<sup>(11)</sup> ここにおいて、メディアと選挙との関わりを儀礼との類推からハーシェイは論じている。一言でいえば、「見せ物としての選挙」(an election as a spectacle)である。ここでいう「見せ物」とは、現実との距離をおきつつ候補者の演技を観劇していた有権者がいつのまにか「見せ物」の舞台に好むと好まざるとに関わらず上らせられ参加を余儀なくさせられるということをさす。いいかえれば、演者としての候補者と観客としての有権者が作り出す「見せ物」である。

メディアによって選挙前の政治行動が候補者、有権者ともに映し出されると、上述したように凝集シンボルに諸々

の問題が込められ、焦点化の陰に隠れて批判や抵抗が顕在化されず結果的に黙従を有権者は余儀なくせられてしま<sup>(12)</sup>う。また、有権者の投票への「権利」が「義務」に転換させられ投票への意欲を減退させることもありうる。投票が民主主義を体现し、それによってできる政府の政策の正統(当)性を裏付けるならば、投票しない人々には政治参加による要求の実現機会が失せる(投票は政治参加の一部であるにも関わらず)<sup>(13)</sup>ような印象を与え、棄権者には政策形成への介入も許されない「黙従」を強いることになる。

エーデルマンの政治シンボル論を候補者と有権者が織り成す儀礼過程として選挙という政治過程に導入したハーシエイにはもう一つの新しい側面(エーデルマンの知見の援用方法としての)<sup>(14)</sup>があった。それは、政治シンボル論の計量政治学的アプローチの概説と実証である。

エーデルマンの理論を実証研究に用いている研究例を概観してハーシエイは、引用は多いけれども表面的であると断じる。これには、エーデルマンの理論は実証不可能<sup>(15)</sup>という神話によるものであると推測している。たとえば、投票行動と態度形成と私的利益の役割を考察する場合にシンボリックな態度は個々人の生活や経済への政策の影響を直接的には弱めると述べる研究(McConahay 1982)をとりあげ、調査データの安直な利用がシンボリックな態度を明快な要点として扱ってしまうことを批判している。また、政治的有効性感覚(sense of political efficacy)は有権者の不安を解消させるための神話であるかどうかを検証した論文(Weisberg 1975)では標準的な調査データを用いた(個別の調査データではなく)ために、個々人の欲求や不安の検証に限界が生じているとハーシエイは述べている。これらの例からもわかるように、エーデルマンの諸鍵概念(シンボル、神話、儀式など)の定義が各研究ごとに様々であって、そのためハーシエイのいう「表面的援用」の謗りを免れなかったのであろうと考えられる。

政治的認知(political cognition)にエーデルマン理論を利用した研究例に対しては、ハーシエイは凝集シンボルの統計的処理方法にQ方法(Q-technique)<sup>(16)</sup>を用いた研究(Brown and Ellithorp 1970)を紹介し、候補者に投影された意味

の分析からシンボルがもたらす緊張状態の説明を行なっている。その他政治言語の分析から構造と過程、内容と文脈の探求をすることによってシンボルの意味の創出にかかわる研究が登場してきていると述べる。

シンボルの分析を通じて意味の創出を行なう主体の一つにマス・メディアがある。ハーシェイは自らのメディア研究を紹介し、次いでベネットの研究(Bennett 1992)をとりあげ、テレビメディアを中心に選挙に関する政治レトリックが形成され、「新しい政治理念の出現は妨げられ、選挙儀礼からは△意味▽が失われてしまった」と、メディアによる意味形成の重要性を説いた。

また、「計量」(調査)アプローチの問題点として彼は二つの点を指摘している。

第一に、「計量」研究は政治的態度のもつ両義的で不安定な性質を軽視してきたと述べる。調査分析では、質問項目に対する個々の反応を明確な意味のある確固たる点であるとしている。ここには、刺激に対する反応の明確な関係があり、そこには意味が共有されているという前提がある。ところが、ハーシェイやエーデルマンは役割の多様性は知覚の多様性と重要な関わりをもつという立場にたっている。政治活動の重要な点は個々の政策ではなく、政策によって醸し出される政治的服従・追従・支持であるという指摘がここから導かれる。明白な対応のみを分析の対象とする調査アプローチは、この点に言及することが難しくなる。

第二に、調査研究自体が対象とする過程の一部となってしまうという点を彼は指摘する。調査がはたして被験者の「日常の意識」を代表するものであるかどうかという調査の方法論的な問題である。たとえば、インタビューの際に個室で行なうか街頭のような他者がいるところで行なうかによっても回答に違いでることが考えられる。したがって調査それ自体が人々の流転する意識の診察を表すことになって、方法論的問題を超えた世論ないし意見形成の研究対象となる要素をはらんでいるのである。いいかえれば、どのように聞いたかによって、世論形成や選挙研究においては、対象のシンボリズムの構成要素が変化することを念頭におかなければならないともいえよう。



今後のエーデルマンの視点を経験的研究に導入する際のポイントとして、ハーシェイは選挙を「政治的見せ物」としてとらえてその成立を詳細に検討することをまず指摘する。つぎに、選挙キャンペーンや選挙直後に政治的問題や争点がどのように意味づけられるか(選挙公約の形成と崩壊の過程を追っていくことなど)を検討する必要がある、と述べている。最後に、選挙過程ではなく、政策決定過程やその他の政治行動の分析に拡張する可能性を指摘している。

### iii V・サピロ

シンボルとしての女性の持つ政治的意味合いをエーデルマンの政治論から展開させたのがV・サピロ(V. Sapin)である。彼女は、従来の政治的リーダーにおける女性の分析が女性の政治家採用、政治行動の活発な女性の知覚や認知などの研究に偏っていて、女性が政治家として登場すること自体の政治的意味はどのようなものかについて考察したものはあまりないと批判する。彼女はこのような問題を解決するための手がかりを、政治行動をシンボルによって意味づけるエーデルマンの視点に求めたのである。

彼女は、政治における女性の意味を考える際にシンボリックな女性、すなわち性役割(ジェンダー)を表象する存在、として位置付ける。方法論として、特定の人々や出来事の意味を検証して個々の状況で左右される事実をできるだけ明確に経験的・理論的に考察する、としている。具体的に依拠するアプローチは、ポストモダンリズムや経験的な認知研究である。これらは、社会的な事物に対して人々が共通のはっきりした視点で解釈がおこなわれているという前提に疑義をとなえるものだからであるとする。ここで注意すべきことは、社会的な事象に対する認識は個々別々のものではなく曖昧さを含んだ大雑把なものであるということである。ここにおいて、ベネットが世論研究でみたように人々の政治社会に対する認識のなかにシンボルの機能が作用しやすい契機がある。それゆえ、シンボルの機能を「政治的」に利用するというサピロの論文は、シンボルの認識という人々の社会的認識をもとにして、そこから、「利益の権威的配分」(イーストン)をめざす「政治的」文脈を帯びるのである。

次にサピロは人物研究におけるシンボルの役割を述べている。政治的人物のもつシンボルの意味は、当該人物をその役職に就かせている背景、人物への人々の反応、役職への人々の反応などを含んでいる。このとき、無限に生ずる意味のなから選択が行なわれるときに作用するのが「カテゴリー（化）」であると述べている。このとき、「女性」という性役割（ジェンダー）は個別の人物に対しては当該人物と背景をつなげる意味付けの働きをするが、「女性」カテゴリーとして顕在化すると、人物理解に必要な他の要素を含む状況と常に同化するとは限らず競合することもあるとしている。八九年の参院選で「マドンナ候補」が多く当選して社会党（当時）の躍進を支えたのは、「家計を圧迫する消費税反対」というシンボルがジェンダーとしての女性を人物評価の他の要素と同化した結果であったが、九五年の改選時では「マドンナ候補」は政治家としての業績において「女性」カテゴリーが対立したためとみることができ、このサピロの指摘の例となろう。

さらにサピロはシンボル政治学とジェンダー研究に言及する。サピアやエーデルマンが示した「参照シンボル」(referential symbol)と「凝集シンボル」(condensation symbol)を用いて、前者は現実の客観的要素を言及するシンボルであるとし、後者はもろもろの事実や出来事を凝縮して一つの出来事や記号として表されるシンボルで情動を喚起させるものであると規定している。ここにおいて、シンボル政治学は脅威と安心の培養を重視するから、シンボル理解には人々の認知構造、連想される事物、信念や態度およびステレオタイプなどの諸反応を考慮するとともに、シンボルから引き出される情緒的な連想や諸反応についても気を配る必要があるとしている。

現実の人物の表象と様々な連想の組合せからなる「象徴的人物（女性）」(symbolic figures/women)は情報の提供よりも情緒を提供（喚起）させる働きが強いとサピロは述べる。女性を母親・妻・主婦・性的対象およびそれらに対応する仕事をする存在と「カテゴリー化」する際にも、それ以外の役割には否定的な評価や感情をもたせる仕組みができあがっている。したがって、これらのステレオタイプに抗して女性が政治の世界へ進出するためには、「象徴的女性」

を活性化させる雰囲気や情緒的な関わり合いを検討しなければならないと彼女は述べている。ジェンダーの中身を固有のものとせず、社会的ないし政治的な文脈および情報媒体としてのマス・メディアを変数にとって調査や実験を行なえば、数量化やミクロ視点からの社会心理学的分析もシンボルの背景をつかむうえで役立つというサピロの指摘は注目に値する。

#### iv R・エントマン、A・ロジェキ

シンボル政治を行なう時にマス・メディアがはたす役割について、政治運動と政府との関係を事例にしてメディアによる政府の政策への黙従を実証したのがR・エントマンとA・ロジェキ(R. Entman, A. Rojecki)である。

彼らは、政治運動に消極的なメディアの報道のもつ特徴について述べる。運動に非好意的な報道が多くなると、初めは関心をもっていた普通の市民が「多数派感覚」を失って運動を支持しなくなる。また、運動に好意的な報道の量が少なくなると、上記の普通の市民だけでなく実際に運動に関与している人々も自らの行動の正当性に疑問を抱き始める。この結果、政府は自らへの圧力が減じたと感じて、「シンボリックな対応」をするようになる。つまり、政府が表向きは民主的だが実際には人々の不安の解消と既存の権力関係の維持をねらった「シンボリックな対応」とメディアの、運動への消極的かつ否定的報道が協力して運動支持者の帰属感を揺さ振るとしている。住民投票を民主主義を否定させるものとしての位置付けたり、総選挙での住民投票と他の争点とを関わらせなかった報道が、「消極かつ否定的報道」の例となりうる。

それでは、なぜメディアが運動に対してこのような態度をとるのだろうか。この問いにエントマンたちはジャーナリストが「フレーミング」(framing)を持っていることによって答えようとしている。大衆運動に対してジャーナリストは両義的な考えを持っているとする。彼は大衆の社会参加を支持すると同時に運動が権力を持ち始めると彼らの方針や今後の展開に懐疑的になる。大衆社会の進展に応じて民主主義的な大衆社会論から貴族主義的なそれに彼らの大

衆観が移るといってもよい。この大衆観と権力エリートからの情報を基準にして運動についての情報が選抜される。ここにジャーナリストの判断がなされ、ニュースに「なる」。このニュースが運動の合意形成や動員の可能性を決める。このときの、報道関係者として持つ認識枠を超えた態度・行動の枠を「フレーミング」とよんでいるのである。

この「フレーミング」が実際の運動の評価ではどのように反映されるかということをエントマンたちは以下のように七つに分けている。

1. 運動の動因が合理的か情緒的かという、運動のもとになる政策概念の合理性の程度。
2. 政策の分析が可能な専門的技術の有無。
3. 運動目標に同意する大衆の数。
4. 政策に影響する政治的戦術や権力の利用。
5. 運動目標を追及する人々のなかの同意の程度。
6. 参加者が主流からどのくらい逸脱しているかという逸脱の程度。
7. 運動が政府の政策に与える影響。

この分類をもとに、エントマンたちは核兵器凍結運動の「フレーミング」過程を分析し、エリートについてのフレーム判断が当該運動と同じように伝わらなかった様子を考察している。

エントマンとロジェキーの研究は、政府の政策に反対する政治的社会的運動がいかに世論からマス・メディアによって「乖離させられていくか」を述べたものであり、世論と「マスコミ」が結託して政策決定に意志を反映させることの難しさを運動面から示しているといえるだろう。マス・メディアのニュース・バリューの形成とその結果という点からみると、彼らの研究はマス・コミュニケーションの送り手研究の分野にも該当するものであるといえよう。

v 八〇年代後半以降のM・エーデルマン——芸術と政治——

前項まで「ポスト・エーデルマン」の状況をいくつかの研究を例にとって紹介してきたが、エーデルマン自身、「ポスト・エーデルマン」の一環として位置づけることが可能であるほど精神的な研究活動を行なっている。ポスト・モダンやフランスの構造主義の影響を受けて、彼独自の儀式・儀礼の政治学と組み合わせた研究が『政治的見世物の構造』(Constructing the Political Spectacle)であった。これに続いて一九九五年に刊行されたのが、政治学と芸術との関連を考察した『芸術から政治へ——芸術作品が政治的概念をどのように形作るか——』(From Art to Politics)である。

エーデルマンはまず、芸術の持つ役割に着目し、知覚(perception)が政治過程に与える影響を理解すべく検討を重ねる。政治の世界はニュース報道を翻訳してイメージや語り・シナリオによって構成される間接的接触に基づく世界であると規定する。この政治世界に対して、小さくてもはっきりしたイメージからなる芸術作品は当該世界を「みる」ことに加えて政治世界での「する」ことにも影響を与えると述べる。国家の建国の神話が現代の政治体制を規定していたり、特定組織や集団に対するステレオタイプも小説や映画によって形成ないし流布することなどが例としてあげられる。このような芸術様式が果たす機能は潜在的であるほうが大きな機能を持つとエーデルマンは述べているが、マス・メディアの涵養効果機能にも似た長期的な効果機能を、政治における芸術のそれに見いだしていると考えられる。

さらに彼は、この芸術の政治への役割を「人々が行動する世界をつくるイメージを供給する」(Edelman 1995 p.3)ものとしてとらえ、政治行動の善悪や、普通、観察や推論の結果として考えるようなリーダーの性格(勇敢/臆病、利他的/利己的、など)についても芸術作品によって導かれるものであるとしている。この考え方は、情動の形成は社会文化に内在する情動を社会化する過程を通じて作られるとする「社会文化的構成主義」(遠藤 1996)に基づいている。

また、上記のイメージの供給の説明としてエーデルマンは、芸術が政治世界と協調する場合には次のような働きを

する、と述べている。すなわち、政治的対立が予想される争点や問題を「カテゴリー化」して、その枠以外の問題を締め出したり、争点の内容を単純化したりすることができる。ついで、公的な政策への関与の仕方を創出したり置き換えたりする。たとえば、剛腕政治家を「悪辣帝王」としたり、「毛並みの良い」政治家を「貴族」に設定して政治世界の推移をドラマ仕立てで一見「戯画化」(caricaturization)しても、かえって話が単純化されて肝腎の政治世界の争点が枠外に出てしまう(と同時にウケない)場合がそれにあたる。

以下、芸術が政治の様々な認識(されるもの)や行動に影響を与える様式をエーデルマンは検証するにつれて、上述したメッセージの間接性のもつ影響力の大きさだけでなく、様々な知見——(a)芸術作品の政治性は曖昧な内容のなかにあること、(b)建築物や公共空間が政治的にあたえる衝撃があること(建物の政治学)など——を見いだしていく。これらを通じて彼は、政治に対して芸術がデモクラシーにとって重要な(意見の)多様性を促進させるだけでなく停滞あるいは否定につながる場合もあると警告する。政治的認識や態度を形成する文化的背景の一つとして芸術をとりあげたエーデルマンの視点の裏には、活字(メディア)以外の図像・映像(メディア)や音声などの非言語シンボルの分析の展開があったのではないか。非言語シンボルの言語による分析の限界を見いだそうとする姿勢がこの研究には感じられるのである。

## ② 儀礼としての選挙

先にあげたW・ベネットは、世論研究と並んで政治制度と儀礼(ceremonies)や神話(myth)との関係を考察している。この儀礼と政治制度との関連において特にエーデルマンの影響が色濃くみられる。エーデルマンがしめしたシンボル研究の要点は、政治制度における民衆の行動の「理念と現実」の間を繋げるものであった。一般民衆が持つ要求をいかに換骨奪胎して、「入力」して、彼らの心理的満足感を引き出すような「出力」を提示するかが制度内の政策形成者

に求められる。この時にシンボルが、情報の凝集と感情の喚起によって政策や制度の正統(当)性に大きく関与するとするのがエーデルマンの主張の要点であった。このエーデルマンの指摘を引継ぎ、「入力」の点では世論形成過程を、「出力」の点では政治行動における神話の体现である儀礼の特質を政治制度——とくに選挙——に見いだしていくのがベネットの研究の特徴となっている (Bennett 1980/1992)。

ベネットは、世論形成における参照基準 (frame of reference) のもとになるものをイデオロギーと価値体系と位置づけ、後者は文化に規定されると説く。文化は信念・価値・行動規範が制度化されたものでもあり、集団が共通してもつ社会認識を形成したり、社会状況の変化に対応する参照基準を作り出したりする。ここで、文化の主要な側面として、ベネットは「神話」を価値や信念に現実の意味づけをするような社会モデルと、「儀礼」を「神話」を使って具体的な社会の問題を解釈するときの行動上の慣例・ルーティーンと、それぞれ定義する。たとえば、社会・政治問題の紛争の解決、政策執行における問題の解決に「儀式」を挙行して「神話」形成や促進に役立てたり、確立された「神話」を社会化させて世論として表出させたりする。それによって、対立を最小限に食い止め(「世論の支持を正統(当)性の根拠にする」、政治的結果に何らかの受容をする人々の数を最大にさせる。

このような政治制度における「儀礼」の特徴に着目していく理由を、彼は個別の「神話」の分析を通じて (Bennett 1980 p.368-380) 明らかにしている。それによれば、あらゆる制度には、一般の人々に対して手続きや審議の内容・決定を公にするために儀礼がある。その儀礼には、人々は積極的に参加することもあれば、制度の存在の正当化に一役買うような受動的な関わりをもつこともある。このような、人々と制度との関係がすでに「政治的」な色彩を帯びている、とベネットは述べる。すなわち、儀礼を通じて人々の注目を引き付け、儀礼が象徴する概念や「神話」への理解を促進させ、対立を弱め、人々の社会や政治に対する反応を「作り上げる」(construct)のである。このような支配—被支配の関係が存在することにベネットは「政治性」を見いだし、社会・経済制度よりもより直接的に支配—被支

配関係が見られるのは政治制度における儀礼と人々との関係であると推論する。また、儀礼によって生ずる支配関係は、政治的神話を長く維持させるためのテーマやイメージ、価値などを儀礼の中でシンボルによって言及することで成立することが多い。さらに、シンボルによる言及によって神話を利用しようとする場合は、制度内の特定の政治的争点や手続きを考慮する場合が多い。この点からも政治制度が儀礼の機能がよりはっきりと表れやすいとベネットは述べている。

政治制度における儀礼と人々との関係をみるにあたって、ベネットは儀礼の機能を次のように規定する。

- (a) 儀礼の参加者ほとんどが、儀礼の場でわかる社会認識（価値・信念）を確かなものにし、公に表す。
- (b) 儀礼状況の特定の争点に(a)で得られた社会認識をあてはめる方法を明らかにする。
- (c) (b)のような適用の正しさを例証する。

選挙を例にとって上記の機能を説明すれば、(a)は投票という行為によって直接政治に関与する意識を人々にもたせるとともに、デモクラシー原理の体現にもなっている。(b)については、次のようになる。候補者は従来の政治神話に基づく価値や信念から公共的な問題や解決への提言を候補者自身の解釈を行なう。それに対して、有権者は特定の争点の解決を期待して一般的な政治神話の枠組みを選ぶ。この候補者と有権者との認識のズレを共通の政治神話の認識によって調整するのである。(c)は、(b)の有権者の社会認識だけでなく、選挙に破れた候補者への「結果の妥当性の認識」をさせる工夫が該当する。ここにおいて、制度上「公平な」役職によって結果が数量化され、かつ記録に残ることが選挙の敗者に勝者を讃え、捲土重来を期すという儀礼的行為をメディアを媒介にして演じさせるのである。

制度と儀礼の関係を、政治制度と儀礼との関係に焦点を絞ったベネットはさらに、選挙制度（政治過程としての選挙を含む）と儀礼および世論形成との関係について言及を進めていく。

選挙を一連の儀礼の体系とみた彼は、政策過程の文脈で選挙を把握しようとする。すなわち、選挙キャンペーンに



用いられるレトリックに対する世論の対応を観察すると、政策上の争点には直接的で身近な争点以外は争点におけるキャンペーン・レトリックにはあまり関心を示さず、自分たちが感じている社会的な緊張やストレスを緩和させるために世論が表出される、としている。また、政策における対立には正統(当)性と現実感を持たせるレトリックが用いられることによって、既存の政治秩序の維持・発展を促す世論が表れる、とも述べている。

ところが、儀礼としての選挙は現在では新しい様相をみせている。従来からの「金権選挙」は相変わらず存在する一方、候補者を商品の一つとみなして合理的かつ功利的に「売り上げ」を得るかというマーケティング行動の一環として、イメージ操作がメディア報道を用いて行なわれている。これは、儀礼行動と相俟って重要な問題が選挙の争点足りえないということを生みだす。さらにいえば、儀礼の役割を超えた役柄をメディア——とくに映像メディア——に映し出そうとする。候補者が政策や争点ではなく、人柄や容姿を重視した「レトリック」を駆使するようになる。テレビを中心にした映像メディアは、過大な情報を洪水のごとく放出するため、視聴者である有権者は選挙に関する判断能力を減退させる。それゆえ、多くの人々はテレビによって「選挙ばなれ」を起こし、結果として組織票に依存する既存の勢力を再選させることになる。このようなメディア操作とマーケティング戦略によって、選挙がもつ儀礼としての意味そのものが失われつつある、とベネットは危惧するのである。

儀礼における「参加者」のカテゴリーをどのように求めるかによってこの危惧は、ある程度までは克服できるように思われる。たとえば、ラング夫妻のマッカーサー・デーにおける「メディア・イベント」(media event)の研究(Lang K&G:E:Lang 1953)を端緒にしたメディアと儀礼との研究(吉見1994)のようなマス・コミュニケーション論からのメディアと儀礼との研究を政治過程研究に用いて、実際の儀礼参加者(直接経験をした人々)とメディアを媒介にした儀礼参加者とを区別して——あるはいくつかの階層に分けて——それぞれが儀礼にどのように関与するかを比較することから始める必要があるだろう。

③政治漫画との関連

M・エーデルマン以降の政治シンボル研究は、様々な分野で発展をした。政治が人間の行動の所作すべてにわたって関わる営みであり、かつ「漫画」がいまや森羅万象を描くことのできる可能性を持つものであるとすれば、政治漫画もまた、シンボル研究の展開からいくつかのことを学ぶことができる。

まず、世論形成過程におけるベネットの知見をもとにしてみると、彼は世論の特質として以下のようにエーデルマンの見解から一般化を試みているとまとめられる。

1 個人は、多種多様な社会的現実からなる公衆にふくまれる。

1-1 a 同じ対象に類似した意見をもっている人々でも、対象の背景理解が異なることがある。新しいシンボルの導入による状況の再定義がされると、それに伴って意見が変化する。

1-1 b 公衆はリーダーや権力組織によって構築される。この構築された公衆をリーダーたちのレトリックによって人々は自己の経験と結びつけて理解する。

2 個人は互いに矛盾するような信念をもち、流動的な政治方法論によって支えられている。

2-1 a 個人は、同じような意見対象にも、シンボル化の程度に基づき、異なった反応ができる。

2-1 b 世論調査や現実世界において、個人は標準となる、客観・中立的な方法で意見の対象を表現することはできない。

3 意見の対象、公衆の構造および表出された意見のそれぞれを考慮せずに、所与の意見の生じた状況とシンボルによって構築されたそれとを別個には論じられない。

世論と政治漫画研究との関連をみると、「正論」としての世論・「民の声」として表現されていることが多く、世論自体を対象とした政治漫画は日本ではあまり見られていない(茨木1991)。しかしながら、世論が上記のように構造化されているとすれば、政治漫画に表れている世論についても、若干の留保をつけて読み込むことが必要になる。先の諸前提を利用してみると、政治漫画における「世論」や「民の声」が誰の手によりどこに向けてどのような状況において表出されているかを丹念に内容分析をしていくことから始めて、政治漫画における世論のシンボル化過程を辿ることが求められる。その際に政治漫画のなかで世論を象徴化する具体的事物、ないし言説が世論の内容によってどのように変わるのかが重要な点となる。これは、政治漫画のテーマ設定とも関連する。政治的争点となる事柄に対して、どの部分をデフォルメし、それを省略(省略は必ずしも作品の主張からはずれたという訳ではない)するかという点を、世論と政策形成者との間のやりとりで描く場合が多いからである。

また、世論が流動的であることについては、選挙の争点のように比較的「短期」的な争点についてならば、一つの概念や出来事を主題にした政治漫画を対象にして世論の変化を炙り出すことができる。これに対して、イデオロギーや信念体系に関わる世論(人々の意見)であれば変動が短期的にはみることが難しいので、かなり長期的な期間の政治漫画の分析をするか、あるいは同一争点について数十年の間隔をあけた比較(六〇年安保と七〇年安保の時代の世論比較など)をすることが考えられる。たとえば、防衛政策に関する世論の変化を政治漫画から読み取ろうとする場合には、自衛隊の成立(警察予備隊、保安隊を経て)時期の五〇年代中盤と冷戦終結から湾岸戦争勃発時の八〇年代末から九〇年代初頭の政治漫画にみられる「軍事・防衛」を象徴する図像・肖像の分析をすることから迫ることが必要になる。

世論の流動性は、ベネットやハーシェイが提示した選挙における儀礼や神話との関係を政治漫画がどのように描き出すかというところにも関係する。近代の政治原理のなかで政治参加を体现する制度が選挙であること、そこに一定

の感情を喚起させること、が政治漫画に表れている。たとえば、次のように第四一回衆議院選挙についての政治漫画を例としてあげることができる。

選挙区が中選挙区から小選挙区へ、かつ比例代表制度と並立した選挙制度に替わって最初の選挙が第四一回衆議院選挙であった。この選挙では、小選挙区で落選した候補が比例区で「救済」されるという事態が生じた。この原因は立候補者が小選挙区と比例区との両方に重複して立候補していることによるものであった。この「重複立候補」をテーマとして、「自分の足で立ち…」と演説する候補者は「重複立候補」のたすきを掛け、「比例区」の名のついた「歩行器」をつけている政治漫画(96・10・10「朝日」M)が描かれた。これに対して、およそ二週間後の政治漫画ではボクシングでKOされた候補者が「比例区」と「小選挙区」のたすきを掛けており、国会議事堂を頭にした人間(議事堂の擬人化)から「比例区当選」のトロフィーをもらおうとしている(96・10・23「朝日」M)。このふたつの政治漫画ではあきらかに、選挙制度に対する描き手ないし「世論」の変化が描かれている。後者の政治漫画をよくみると、「うれしさは『反比例』というキャプションにみられるように、民意の多数を反映させ、有権者の支持の最高位を当選させるというデモクラシー原理に抵触し、十分な民意の反映が見られないのは重複立候補制ではなく、比例代表制に原因がある、とも読み取れる「解釈の余地」を広げた結果を生み出している。比例区の問題はこの新聞での政治漫画では二度目であり、重複が問題であることは読み手が既知であるという判断もあって表現を省略したともみられるが、結果的に「重複」より意味の範疇が大きな「比例区」シンボルによって意味の拡散が生じたのである。

このような、範疇の明確なシンボルからより広い範疇のシンボルの利用の変化は、ジェンダーを描く政治漫画にも表れている。この場合、特定個人を描くことによる意味の確定から、ジェンダーを描くことによる「シンボリックな女性」により個人のもつ意味をジェンダーのそれに置き換えることがなされる。一般に、選挙のみならず政治領域における政治漫画のなかで特定化された個人として女性が登場するケースはまれである。第四一回衆議院選挙においては、

土井社民党委員長を除いて名前を特定できる女性ほとんど見られない。これに対して投票促進の自治省の「ポスター」として登場したり、選挙キャンペーン中の「ウグイス嬢」として政治漫画に登場するのは「シンボルとしての女性」としてである。特に「総選挙」のポスターに登場したオリンピック選手は、もし単独で政治漫画に登場するならば彼女個人のスポーツ選手としての能力の評価の結果によると考えられるが、有権者に選挙の投票を喚起させるためのポスターで登場しているのは、「シンボリックな女性」の役割を賦課されているとみることが出来る(96.10.6「朝日M」)。

このように、「シンボリックな女性」による描写は政治漫画では格好の素材となる。既知のイメージに委ねて作品への関心をひきつけようとするこの手法は、描き手にとっても読み手にとってもコストのかからない手法である。また、これによって政治漫画の中での主張に導くための手法とするかぎりにおいて効果がある。しかし、この「知覚・認知」レベルの影響を超えて読み手が政治漫画を読み込むことがない場合、つまり文字通りの「知覚・認知」レベルに読み手への影響がとどまるならば、ジェンダーが内包する既存の伝統的な価値のみが読み手に伝わることになる。ステレオ・タイプの利用は政治の儀礼性を暴き出すだけでなく、政治漫画自らが形式化・形骸化して儀礼行為に加担することもありうるのである。

(9) 一九九二年にアメリカ政治学会大会で報告されたペーパーがもとになっている。

(10) それゆえ、世論調査で多数の反対があろうとも、選挙違反を大量に出そうとも、当選さえすれば「国民の審判」を受けたことは大きな意味をもつ。

(11) 地方選挙にこの傾向は強い。国政レベルの選挙の儀礼性とは性格が異なるように思われる。今後の課題としたい。

(12) 第四一回衆議院選挙で、「沖縄」や「原発」は争点であったはずであるが、各メディアはこぞって「争点の見えない選挙」と報じた。

- (13) 住民投票も政治参加の一つの形態であることは言うまでもない。
- (14) 計量とシンボルとの関係は、数量をシンボルとみなせばすべてがシンボル研究ということもできる。しかしながら、本稿ではシンボルの機能と操作に着目しているため、すべてをシンボル研究とみなす立場はとらない。
- (15) シンボル研究は観察者の主観に左右され、妥当性や一般性をもたないという神話をさす。
- (16) 各個体について多数の変量の測定データを因子分析するとき、個体間の相関行列を求めてから分析に入る方法をさす。
- (17) 石ノ森章太郎は、対象の広さを考慮して、現代の「漫画」を「萬画」と呼んだ。